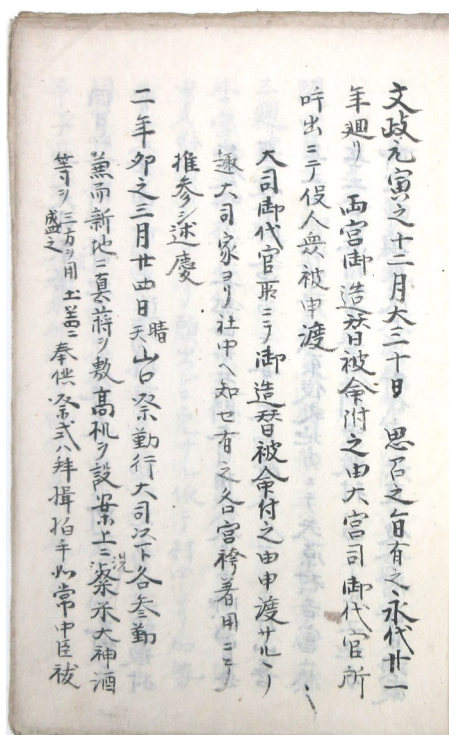
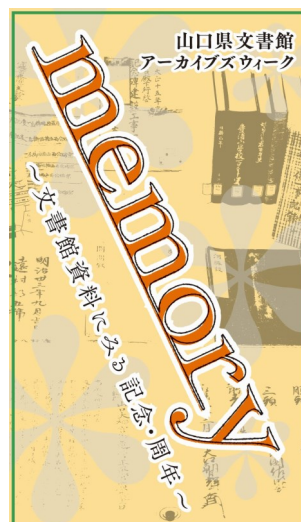




高嶺両皇太神宮正遷宮記（多賀社文庫474）



あれから ③

高嶺大神宮の式年遷宮(1)

《定期的に造り替えるお宮》

神社で、一定の年数ごとに社殿を造り替え、新しい社殿に御神体を遷すことを式年遷宮といいます。

定期的な造替を行う理由としては、建材である木材の耐久年数、職人等の技術・知識の継承、清浄性の維持、神の再生の象徴、…等、様々なことがいわれています。厳密にどれ、というのではなく、これらが絡まり合って慣例化したものというのが一般的な見方です(『国史大辞典』「式年遷宮」ほか)。

式年遷宮は様々な神社で行われていますが、よく知られているのは伊勢神宮の式年遷宮でしょう。直近の平成25年(2013)の遷宮はニュースにもなっており、記憶されている方も多いかと思います。

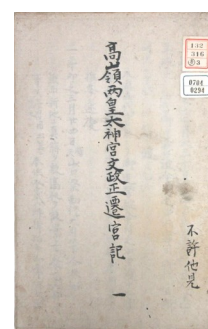
同社の式年遷宮は20年に一度で、次の遷宮は令和15年に予定されています(伊勢神宮ウェブサイト「第63回神宮式年遷宮」)。式年は神社によって様々ですが、20年前後のところが多いようです。

《高嶺大神宮の式年遷宮》

周防国吉敷郡上宇野令(現山口市)鎮座の高嶺大神宮(山口大神宮)は、永正17年(1520)、大内義興が伊勢神宮を勧請した神社です。そのため、伊勢神宮に準じて式年遷宮が行われてきました。戦乱等による延期・中絶を挟みつつ、造替の年から数えて21年目の年、つまり満20年に一度、遷宮を行ってきたとのこと(山口大神宮ウェブサイト「大神宮のご紹介・由緒」)。

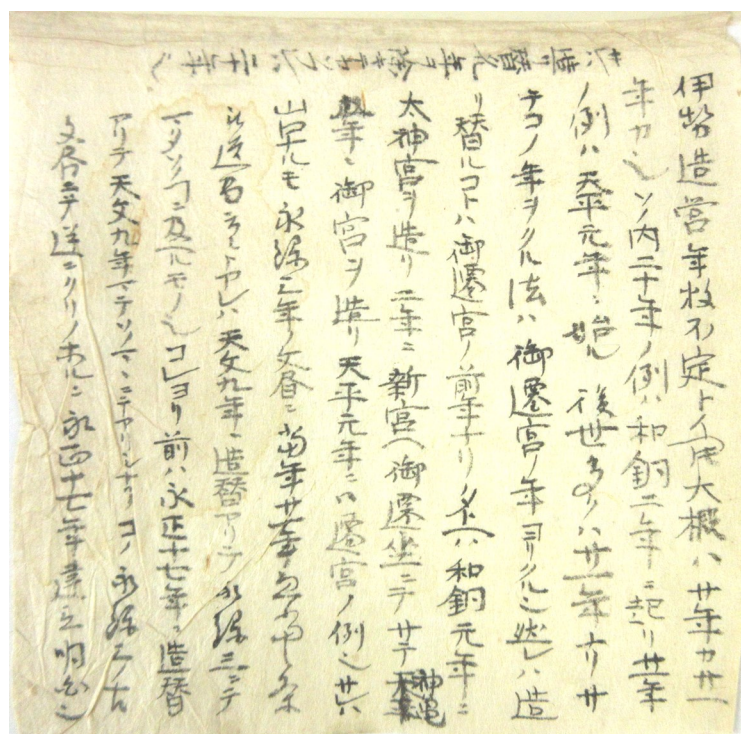
当館には、江戸時代の同社の式年遷宮の概要が窺える記録がいくつか残っています。例えば「高嶺両皇太神宮正遷宮記」(上写真)は、文政3年(1820)に行われた遷宮の記録です。

このときは、2年前の文政元年に遷宮を行うよう藩から沙汰(許可)が下されています。翌2年、近隣の町・村の奉仕を受けつつ、1年をかけて社殿を造り替え、同3年2月から3月にかけて、内宮、外宮の順に御神体を遷したようです。

高嶺両皇太神宮
正遷宮記

高嶺大神宮と同じ上宇野令村に鎮座した多賀神社(現在は山口大神宮内に鎮座)の大宮司高橋家の者によると考えられる記録です。

山口の主要神社(山口五社)の宮司として遷宮に関わったでしょう、多賀社文庫内には他にも遷宮に関する記録がのこっています。



風土注進案 上宇野令之一

（県庁伝来旧藩記録 風土注進案 239）

《式年をめぐる注記》

同社の式年については、萩藩が天保末年に各村に命じて社寺の由緒等も含めたそれぞれの概要を提出させ、編纂した地誌、風土注進案の「上宇野令村之一」（県庁伝来旧藩記録 風土注進案239、刊本『防長風土注進案』13）に興味深い記述が残っています。本文の「両宮二十一年一度の造営正遷宮の式勢州に準ず」に付された、式年遷宮の式年に関する注記です。高嶺大神宮の勧請から提出当時頃までの遷宮と、式年の数え方、2つの話題が付箋に記されています。

これらの付箋は、同書の編修に携わった者たちによって付けられました（『防長風土注進案 研究要覧』緒言、1966年）。

上の写真はこのうちのふたつめ、式年の数え方に関する付箋です。式年が20年なのか21年なのか、を伊勢神宮の例と過去の高嶺大神宮の例、両方を照らし合わせて論じています。内容を確認していきましょう。

まずは伊勢神宮の式年について、年数は定まっていなが大体20年か21年とし、20年で遷宮した初例は和同2年(709)遷宮、21年で遷宮した初例は天平元年(729)遷宮で、「後世多クハ廿一年ナリ」と、後に21年で遷宮するようになったとしています。これについて、実際に伊勢神宮の遷宮年を確認すると、14～15世紀頃から、数えて21年間隔での遷宮が増えていくようです。ただし、このころは延引や中断が多かったので、21年間隔で安定したのは江戸時代に入ってからです(中西正幸『神宮式年遷宮の歴史と祭儀』(1995年)遷宮関係年表)。

なお、年の数え方についても続けて言及しており、遷宮した年から数えるものであるとしています。数え年同様、遷宮の年を1と数えるということです。

また、新社殿の造営と遷宮の時間関係については、社殿の造営を遷宮の前年に行うものであるとしています。

以上、伊勢神宮が遷宮の年から数えて20年で新社殿の造営、21年で遷宮を行っていると整理したうえで、高嶺大神宮の考察に移ります。なお、このスケジュールは「高嶺両皇太神宮正遷宮記」に記されているものと合致します。

高嶺大神宮の場合、永禄3年(1560)の文書に21年目に当たるので造替する旨が記されていることから、同社の式年は(室町時代以降の)伊勢神宮同様21年であり、永正17年の遷座についても間違いはないとしています。

《注記の背景》

なぜこのように細かい注記がなされたのでしょうか。それは、この付箋が本文の「両宮二十一年一度の造営正遷宮の式勢州に準ず」の注記であることと、この付箋の最後、上部余白に書かれた「造り替タル年ヲ除キテカソフレハ(数ふれば)二十年也」が答えになっているように思います。

すでに説明した数え方について重ねて言及しているということは、式年が20年なのか21年なのか、どこを起点として数えるか(数え年なのか丸年なのか)は、当事者ならともかく、編修者たちにとっては掘みにくいことだったのでしょう。

何年に一度、という場合、いつを起点にするか、どのような数え方にするかというのはしばしば問題になりますが、式年遷宮もその例に漏れなかったことが窺えます。